

地域で学び、 地域で育つ。

東京家政学院大学では、地域貢献を教育、研究に続く第三の使命と捉え、地域連携活動を積極的に推進しています。これまでに衣、食、住、デザイン、児童、福祉など、生活学に関わるさまざまな分野で地域の方たちの協力を得て連携活動を進めてきました。

ところで、本学の地域連携の特徴のひとつは、学生が主役となって進めていくということです。授業を通じた連携はもちろん、連携研究においても教員の指導のもと、学生が主体的に関わります。このことは、本学が地域連携を単に地域貢献の機会と考えているのではなく、教育研究活動を充実させるための機会ととらえていることを示しています。

大学の教育研究活動が充実し、学生の力量や研究レベルが向上すれば、自ずと地域貢献できる可能性は高まります。本学では地域連携活動は、大学から地域への一方通行ではなく、教育研究の充実が地域貢献に繋がり、また、地域貢献が教育研究の充実に繋がるという好循環を生み出す仕組みと考えています。そのため、地域連携活動と教育研究活動は密接に結びついており、自ずと学生が主役になります。

このような本学の地域連携活動の特徴を踏まえ、本事例集では、活動に参加した学生の活動を中心にご紹介いたします。それぞれのプロジェクトにおいて学生の成長が、結果として地域貢献に結びついており、学生の成長と地域貢献という一見無関係に思える両者が、実は密接に繋がっていることがわかります。

本事例集により、地域の皆さまには、本学の地域連携の特徴をご理解いただき、今後ともお力をいただきたくお願いいたします。また、学生の皆さんにおいては、地域連携活動に積極的に参加し、それぞれに大きな成長の機会を得ることを願います。

平成31年3月

東京家政学院大学

地域連携・研究(町田)センター

地域で学び、地域で育つ。

東京家政学院大学 地域連携事例集 2019



プロジェクト概要

- テーマ
トマトを用いたレシピ開発
- パートナー
横浜農業協同組合(JA横浜)
山本農園
- 担当教員
小口 悦子 教授
- 実施期間
2018年4月～2018年9月

生産者の熱意をレシピに！
トマトのレシピ開発は今年度で3回目となります。
JA横浜からの依頼を受け、生活デザイン学科3年の専門科目「調理と素材」の授業で横浜の山本農園の山本さんよりトマトの生産に関する講義をしていただきました。品種、水やり、施肥など収穫までのプロセスの講義を受け、時間をかけておいしトマトの生産のため、様々な勉強や努力をされていることを知り、山本さんに認めってもらえるレシピを提案したいの思いで取り組みを開始しました。5月には山本農園に見学に行き、収穫も体験しました。全員が一品以上のレシピを考案し提供いただいたトマトを使って試作・評価ののち、6月には成果報告を行いました。JA横浜と生産者山本さんからそれぞれに講評をいただきました。全員で投票を行い、7月の試食会への候補を絞り込みました。

試食会を開催

これまでの成果について7月8日にJA横浜「ハマッ子」直売所都筑中川店にて試食会を開催しました。「東京家政学院大学が提案するトマトのベイクドチーズケーキ」とトマトの天井のレシピ」を配布しながら直売所に来店された方々に試食いただきました。新しい発想に、おいしいですね、作ってみたいです、と好評でした。レシピは、JA横浜の各直売所で配布されました。このことは、日本農業新聞(8月4日)「Agri横浜」9月号に掲載されました。

トマトを用いたレシピの開発



学食プロジェクト

—企業連携を通じて企画開発

コンピテンシーを養う—

SPICY CHICKEN JAMBALAYA

TOKYO KASEI GAKUIN UNIVERCITY SECOND DINING HALL

¥450

11/5~11/9 STUDENTS × CHEF

KVA, DISHING AKUSHOKU

プロジェクトの目的①地域のステークホルダーの皆さまにK (Knowledge 知識)とA (Arts 技術・アーツ)を還元すること

フードサイエンス&アーツ研究室では、「サイエンスとアーツの観点から食を探索する」を理念として研究活動を進めています。研究室で培った食品機能とフードビジネスの研究ノウハウを地域のステークホルダーの皆様へ還元したいと考えています。

二〇一七年秋よりスタートした学食プロジェクトでは、私たち町田キャンパスの学食を、運営会社の東京ビジネスサービスの株式会社さま・学生・職員・教員の4者のコラボレーションで、より利用しやすく満足度が高いものにする取り組みを進めています。CVC(顧客価値連鎖分析)により学食を取り巻くステークホルダーを認識し、フィード・スタディーにより学食の問題点をSOT(分析後、メニュー企画など効果的な施策を実行した結果、利用率と満足度が向上しました。

今後は、オープンキャンパス企画の充実や、ミラージュ(学内コンビニ)の利用率・満足度の向上も取り組む予定です。また、地域の皆さまのご要望を伺い、それぞれのニーズにお応えしたいと考えています。



プロジェクトの目的②学生のビジネスコンピテンシーを養い、キャリア形成に対するモチベーションを高めること

学生は、4年間の学びで食品科学やフードビジネスの知識と技術を学びますが、それだけでは社会で実践する力(コンピテンシー)は養われません。知識と技術の使い方を学び、目的と意義を自身で考える必要があります。

企業連携による地域貢献活動は、その格好の学びの場です。学生は活動を通して大きく成長します。課題解決に必要な論理思考力と、他者と対話する力を自然と身につけ、自信を得てキャリアに対するモチベーションを高めていきます。本学が最終的に目的とするV(徳性)を実現する学びとして地域連携活動は大きな役割を有しており、平素よりステークホルダーの皆さまに感謝しております。学生も地域の皆さまとの活動をとてもたのしみしています。今後ともよろしく願いいたします。

プロジェクト概要

- テーマ
学食の利用率と満足度の向上
- パートナー
東京ビジネスサービス株式会社
- 担当教員
黒田 久夫 准教授
- 実施期間
2018年4月～2019年3月

友愛十字会の依頼は、ボディはオレンジ色、右の頬に赤系のハート、左にはブルー系の十字、胸にはイエローの星をつけるという指定で、着ぐるみを制作する事でした。

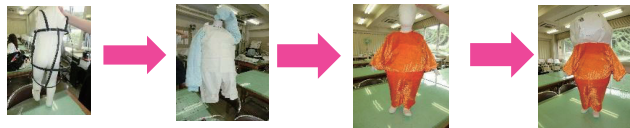
これまでの歴代の「ゆうあいくん♪」2体の写真を参考に、着用者の身長155cm〜170cm用との条件で2018年4月からプロジェクトが始まりました。生活デザイン演習C（前期）とD（後期）の科目としてスタートし、2年生6名が参加しました。前期は週に1時間、15回の授業で、後期は週に2時間頑張って作業しました。

「ゆうあいくん♪」の腕は、ダウンのコートの袖部を解体して使用しています。靴は風呂場で使用するブーツです。手の中にはキルティング2枚が手袋状にしています。頭部と胴体部の膨らみはウレタンを使用しています。フリースで出来ている胴体の外衣は、立体裁断法でパターンを制作しました。

着ぐるみ制作は初めてだったので、前期は幼児用のサイズで試作し、後期に大人サイズを制作しました。完成まで1年間かかりましたが、立体を制作する方法について多くを学ぶことが出来ました。

前期
幼児サイズの試作品

幼児サイズの着ぐるみ試作



ボディの制作

ボディ部材料
フリース生地、ウレタン、シーチング、不織布、ダウン
コートの腕、マジックテープ



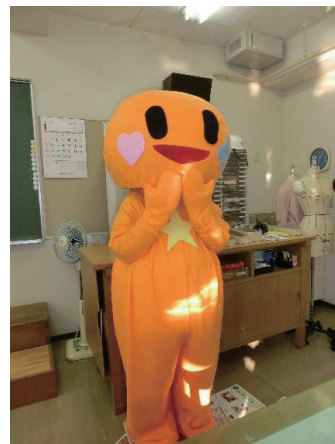
頭部材料
ウレタン、ボーン、PPシート、スポンジ、タコ糸、絹糸、ヘルメットの内部、綾テープ、フリース生地

頭部の制作



プロジェクト概要

- テーマ
「ゆうあいくん♪」制作
(着ぐるみの制作・デザイン)
- パートナー
社会福祉法人 友愛十字会
- 担当教員
藤田 恵子 教授
- 実施期間
2018年4月～2019年3月



「ゆうあいくん♪」制作



ケーキの新規開発



新たなケーキレシピの提案への挑戦

横浜市のフランス洋菓子店フロランタンは、30年続く地元で親しまれた洋菓子店です。上質な材料を使い、手作りで無添加の焼き菓子を数多く販売しています。中でもケーキの基本であるスポンジケーキには定評があります。お客様の様々な要望に応えるため、若い人のアイデアを取り入れたいと新レシピの考案の依頼がありました。

そこで、生活デザイン学科高橋由希さんが卒業研究のテーマとして、新規ケーキについて検討することになりました。初めに、本学の4年生を対象に食べてみたいケーキの調査を行い、6月には店舗を訪問し、ご店主とのミーティングで、提案するケーキについて、そのコンセプトを絞り込みました。

試行錯誤の結果、フロランタンで人気のスポンジケーキを使ったスッポト、季節感を出すことができる薩摩いもスイーツト、地元産のトマトを使ったチーズケーキ、学生に人気のミントの香りをいかした、ワンドケーキ、和風テイストのきな粉を使ったティラミス他8種のケーキレシピを提案しました。

この取り組みは、31年2月に本学で開催された地域連携報告会で、パネル報告と試食を提供しました。

提案したレシピが商品化

フロランタンからの課題にあわせて8種のケーキメニューを提案しました。そのいずれも、プロならではの技術とアレンジで素晴らしいケーキとなって12月に販売が開始されました。

常連のお客様からも好評を得ていることもあり、季節に合わせて、これからは地元の方々にも長く愛されるケーキとして残っていくことを願っています。



プロジェクト概要

- テーマ
ケーキの新規開発
- パートナー
フランス菓子 フロランタン
- 担当教員
小口 悦子 教授
- 実施期間
2018年4月～2019年3月

Case5 青バナナ粉を用いたアレルギー対応のレシピ開発 by 生活デザイン学科、食物学科



青バナナ粉との出会い

昨年、NPO法人日本・東南アジア技術推進協議会からフィリピン・レイテ島の青バナナの有効利用への協力の相談がありました。

レイテ島は貧富の差が激しく、生活水準を上げるための支援として同法人は、青バナナ(サバナナ)を乾燥させ粉末にした青バナナ粉の製造と日本での販売事業を行っています。しかしながら青バナナ粉の有効な調理法が少ないことから、料理レシピの検討の依頼がありました。

どのような調理特性があるか未知数でしたが、料理や菓子に利用できれば販路の拡大が期待できることから、支援の一端を担えと考える連携協力を行うことになりました。

生活デザイン学科の後藤奈津美さんが、卒業研究の課題として取り組むことになり、吸水・加熱による調理特性を小麦粉と比較しながら検討しました。その結果、菓子には利用しやすく、小麦粉では得られない食感や風味が好まれることが分かりました。小麦粉アレルギー対応としても活用できるレシピとなりました。



プロジェクト概要

- テーマ
青バナナ粉を用いたアレルギー対応のレシピ開発
- パートナー
特定非営利活動法人
日本・東南アジア技術推進協議会
- 担当教員
小口 悦子 教授
- 実施期間
2018年6月～2019年3月

バナナスターチ レシピ本



NPO法人 日本・東南アジア技術推進協議会 × 東京家政学院大学

レシピ本の作成

研究の成果をまとめ、青バナナ粉を使ったレシピ本(「バナナスターチレシピ本」)を作成しました。NPO法人日本・東南アジア技術推進協議会本部にて英語にも翻訳され、同ホームページで公開されています。多くの人の目に触れ、新しい利用法が広がることで、レイテ島の人々の生活水準への支援につながることを願っています。

青バナナ粉を用いた アレルギー対応のレシピ開発

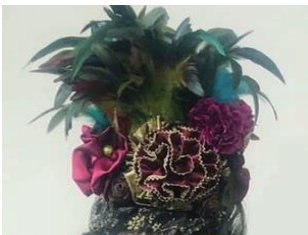


南大沢コミュニティオペラの方針

公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団が企画・主催し、舞台芸術の普及や若手の養成を目的としてプロ・アマチュア・学生・市民を問わず、地域に根ざしたオペラ活動をしています。本研究室では6年前から参加し、今年は『こうもり』を、去年は『魔笛』の衣装をデザイン・制作および管理を担当しました。

教育のねらい

- ① 演出家等に的確なプレゼンができること
- ② 制作・練習等の日程計画や自己管理ができること
- ③ トラブルに対して解決・対処ができること
- ④ 社会的なマナーを身につけること
- ⑤ 積極的に参加し、学年を越えた繋がりを深めること



プロジェクト概要

- テーマ
南大沢コミュニティオペラ『こうもり』と『魔笛』の衣装制作
- パートナー
公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団
- 担当教員
富田 弘美 准教授
- 実施期間
2017年4月～2018年3月『魔笛』
2018年4月～2019年1月『こうもり』

衣装制作の流れ

7月頃にキャストが決まり、衣装デザインを演出家と打ち合わせます。8月に学生がデザインを考えて生地サンプルを集め、9月に演出家や財団のスタッフにプレゼンテーションを行ってデザインが決定します。10月から12月は材料を調達し、製図、裁断、仮縫い、フィッティング、補正、本縫い、仕上げになります。1月中旬には場あたり、ゲネプロがあり、ステージ上の衣装を確認して公演当日を迎えます。



オペレッタ『こうもり』ロザリンデの衣装



オペラ『魔笛』の大神祭のザラストロ、弁者、僧侶の衣装 撮影:長澤直子

南大沢コミュニティオペラ『こうもり』と『魔笛』の衣装制作

250組を超える親子との出会い

JA横浜では、農産物の普及や地域貢献活動、地産地消の推進などの目的でさまざまな料理教室を開催しています。乳幼児期のお子さんをもつお母さんたちが気軽に料理教室に参加できるように、本学との連携により、保育付きの料理教室を企画し、開催しています。今年度は6年目になります。毎年参加者の増減がありますが、昨年度が1回あたり10組の参加でした。しかし、今年度は、開催場所や時期などの検討の結果、20組の親子と充実した時間を持つことができました。希望者は多数で、キャンセル待ちがあるほどです。

毎年実施する中で、①母子別々の活動であることでの丁寧なかかわりの必要性(母子分離のプロセスを工夫する技法の開発)②保育担当のチームワークの構築(方向性・内容性・関係性機能を意識したチーム保育)③安心・安全が実現する保育内容の工夫(衛生面・発達への配慮などの課題が明確化しました。本学で30年間実施されている幼児グループ(児童臨床実習B)の理論・原理が生かされて、実施されています。



プロジェクト概要

- テーマ
子育て中のお父さん、お母さんを対象とした料理教室での保育内容を企画、運営する。
- パートナー
横浜農業協同組合(JA横浜)
- 担当教員
田尻 さやか 助教
- 実施期間
2013年5月～2019年3月

保育付き料理教室は、「JA横浜たすけ愛の会」のみなさんと本学学生、教員が保育を担当します。子どもたちがのびのびとすごしている姿から、学生やたすけ愛の会の皆さんは喜びを感じていますが、参加者する親からの保育に対する期待を知ると、あらためて保育する「責任」について、考えることがあります。人との出会いの実際の場で感じることから学ぶことが多くあります。

また、講座の中で子育てに役立つ情報をミニ講話の形でお母さまたちにお伝えしています。今年は教室のために用意した手作りおもちゃの紹介や家でもできる親子遊びを紹介しました。さらに、その日の保育の様子も伝えながら進めると、日ごろの子育ての悩みを気軽に話せる子育て相談の場にもなっており、子育て支援の1つの新しい形として機能しています。

「保育付き！子育て教室」に関する活動協力



「育ママComebackセミナー」に関する活動協力

JA横浜の地域ふれあい課と連携して5年が経過し、保育付き料理（子育て）教室のノウハウを育休明けに向けた職員研修に活かすことができないかと人事課との検討が平成29年秋に始まりました。保育スペースや道具などはこの5年間で料理教室で使ってきたものを使用することができ、保育環境のイメージは少しできましたが、育休明けが目前に迫った職員研修のとなりで行う保育となると、0〜1歳児が多いことが予測されました。

乳児の保育で大切になることは大人も子どもも安心できること、清潔であること、安全であることが確認されました。生まれてから約1年間お母さんと一緒に過ごすことが当たり前だった子どもたちにとって、急にお母さんから離れることは難しいことです。研修会場のそばにマットを敷き、お母さんたちが見えるところですこせるように、配慮しました。そのことは、預けるお母さんにとっても勉強しながら子どもたちの様子を感ずることができて安心だったようです。4月からの職場復帰に向けて自信になったと感想を言っていた方もいらっしゃいました。



プロジェクト概要

- テーマ
「育ママComebackセミナー」
- パートナー
横浜農業協同組合(JA横浜)
- 担当教員
田尻 さやか 助教
- 実施期間
2018年4月～2019年3月

職場復帰の前に安心して子どもと一緒に仕事場を訪れ、職場の雰囲気や味わい、職場復帰のイメージを持つことが安心して働くことの1つの助けになることがこの取り組みを通して明らかになりました。

学生にとっても30人近い人数の乳児を12人の学生がチームになって保育する面白さ、大変さ、そして責任の重さを感じた取り組みとなりました。

第1回目を平成30年2月13日に実施し、環境設定や道具の用意など見直す点は多くありましたが、無事に終えることができました。参加者から好評であったといっていたときにはとてもほっとしたことを覚えています。その日のうちに第2回目が企画されたことも驚きました。本年度は平成31年2月8日に開催されました。参加者数も去年と同様30名程度でした。

Section 2

プロジェクト・サマリー ～さまざまな地域連携事例

※ 本レポートに記載されている学生の学年や関係者の所属・肩書等は、いずれも平成31年3月現在のものです。

さがみはら環境まつり参加(1)

★東京家政学院大学の学生として

生活デザイン演習A(1年生)の授業の一課題として、さがみはら環境まつりに参加し「大学の先生と楽しむ体験教室」を開催しました。入学したばかりの1年生の初年次教育として、大学への所属意識の高揚と人間関係の構築を図ることを目的として実施され、学生同士の共同作業、及び地域の方々と協働する体験学習の機会となりました。

★大学の先生と楽しむ体験教室

学生が講師となり、子ども対象の7つの教室、
①来て・見て・触って・ポーラスコンクリート ②残り布でお好み色の花の髪飾り ③折ってたたんでペーパーボックス ④お気に入りの洋服をリメイク
☆アクセサリケース ⑤葉っぱ de スタンプ ⑥エコでキラキラまんげきょう ⑦新聞紙をくるくるキュキュッとお花のブローチを実施しました。更に、それらの活動の様子を撮影する撮影班を編成し、学生活動の記録としてDVDを制作しました。



★参加報告会の実施

終了後には、各テーマの取り組みについてグループごとにパワーポイントの資料を作成し、口頭発表による報告会を実施しました。終了後のアンケートでは、参加して良かったというコメントが多数寄せられました。



- ◆担当教員 花田 朋美 准教授
- ◆パートナー さがみはら環境まつり実行委員会
- ◆実施期間 2018年4月～2018年7月
(さがみはら環境まつり開催:6月24日)

さがみはら環境まつり参加(2)

★学生実行委員として

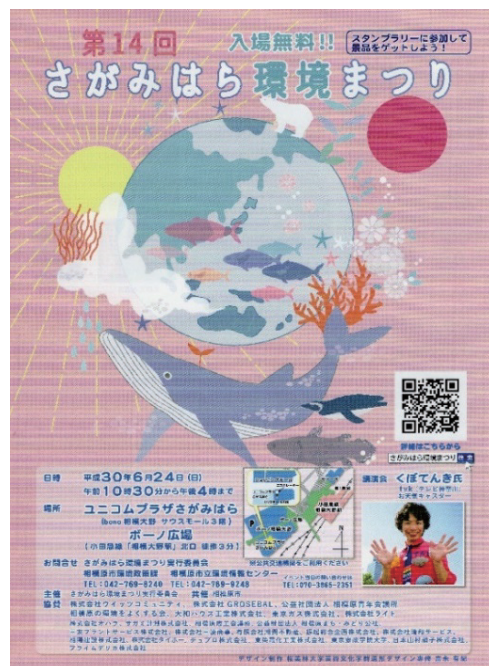
生活デザイン学科4年生6名が学生実行委員として、さがみはら環境まつり実行委員会に参加しました。学生実行委員の主な活動は、毎月の会議へ出席し、企画の提案や意見交換、来場者参加型の企画・運営、更に広報活動として、ラジオ出演や市内の小学校へのチラシやポスターの発送作業などでした。

★来場者参加型「古着で作るモザイクアート」

4月からは生活デザイン演習Cの授業の一課題として2年生5名が加わり、来場者参加型「古着で作るモザイクアート」を実施しました。着用しなくなったTシャツで小さなお花を作り、大きなモザイクアートを制作する企画です。相模原市を代表する風景やキャラクターなどをモチーフとしたデザインを考えました。更に、参加者が簡単に作業できる工夫をしました。

★さがみんのモザイクアート

当日は、相模原市マスコットキャラクター「さがみん」をモチーフとしたモザイクアートを完成させることができました。参加してくれた子どもたちも学生も、完成した時の達成感は大きなものだったようです。この企画を通してモノの廃棄について考える機会となり、日々の生活を見直し、環境配慮への関心を持って頂くきっかけとなれば幸いです。



- ◆担当教員 花田 朋美 准教授
- ◆パートナー さがみはら環境まつり実行委員会
- ◆実施期間 2018年4月～2018年7月
(さがみはら環境まつり開催:6月24日)

イーアス高尾での衣装展示

本研究室(衣分野)では、コミュニティオペラやバレエ公演などに衣装協力として参加しています。近隣の商業施設(イーアス高尾・そよかぜ広場)にて、舞台衣装の作品展を開催しました。

商業施設での課題

地域連携活動は、商業施設と大学が共に有益であることが望ましいことです。学生たちの課題は、①集客と賑やかな空間づくり、②子どもたちへのプレゼント、③安全性を考えた展示などです。そこで、フォトスポットを設置してハロウィンの小道具を用意し、子どもたちにはじ引きによりお菓子と仮面を差し上げ、テーブル等に掛ける生地は防災加工のものを使用しました。



作品はオペラ『魔笛』のザラストロ他6点とバレエ『シンデレラ』の衣装、意地悪な継母と姉妹の衣装、およびハロウィンの魔女の衣装などです。



作品を制作する分野では、学生の作品を学外のギャラリーなどに出るだけ多く展示することを考えています。今回はイーアス高尾のご協力をいただき、作品展を開催できたことを大変嬉しく思います。



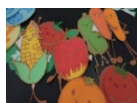
- ◆担当教員 富田 弘美 准教授
- ◆パートナー イーアス高尾
- ◆実施期間 2018年10月28日

町田市との連携による食育活動の環 ～ゲーム感覚の体験型食育クイズで人々の食事改善を促す～

11月11日、町田市民フォーラムにて「第5回町田市食育フェア」が行われました。食物学科食育研究会の有志学生14名が初出展し、来訪者に対しミニ食育を行いました。ゲーム感覚の体験型食育クイズとして、「正しい和食の配膳」、「1日に必要な野菜摂取量」を出題し、参加して下さった方々に、オリジナル食育リーフレット、和食料理ミニチュア消しゴム、ベビーリーフの種を配布しました。同時に、食習慣に関するアンケート調査も行い、地域住民の方々の食生活実態も把握しました。



当日は211名がクイズに参加し、209名がアンケートに回答されました(延べ来訪者331人)。地域の人々に食生活改善を促せただけでなく、学生自身も栄養士および栄養教諭の免許取得に向けて、貴重な食育体験ができました。食育研究会では、これからも楽しく学べる食育を企画し、出前食育で地域の人々と触れ合っていきたいと思っております。皆様からのご連絡をお待ちしております。misawa@kasei-gakuin.ac.jp



- ◆担当教員 三澤 朱実 教授
- ◆パートナー 町田市
- ◆実施期間 2018年5月～2018年11月
(食育フェア開催:11月11日)



東京家政学院大学 地域交流会2018 レポート

本学では、地域の方との交流と本学の地域連携活動に関する情報発信の機会として、平成19年度より、年に1回、地域交流会を開催しています。平成30年度は、平成31年2月8日(金)に町田キャンパスにて開催しました。交流会では学生が主体的に参加するという本学の地域連携活動の特徴を全面にアピールすべく、成果発表はすべて学生が行いました。

「東京家政学院大学 地域交流会2018」開催概要

◆日時 平成31年2月8日(金)14時～17時

◆場所 町田キャンパス ローズコート

◆プログラム

(1)開会挨拶

東京家政学院大学 学長 廣江 彰

西武信用金庫 法人推進部 副部長 山崎 紀嗣 様

(2)講演「産学官・地域連携について」

東京家政学院大学 学長 廣江 彰

(3)連携事例発表

①青バナナ粉を用いたアレルギー対応のレシピ開発

＜連携パートナー＞特定非営利活動法人日本・東南アジア技術推進協議会

②さがみはら環境まつりでの取り組み

③町田市との連携による食育活動の環

～ゲーム感覚の体験型食育クイズで人々の食事改善を促す～

④コミュニティオペラ『こうもり』と『魔笛』の衣裳制作

＜連携パートナー＞公益財団法人八王子学園都市文化ふれあい財団

⑤『育ママComebackセミナー』に関する活動協力

＜連携パートナー＞横浜農業協同組合

(4)連携事例パネル展示交流会＆連携相談対応

◆実施体制

主催：東京家政学院大学 共催：西武信用金庫 後援：相模原市

◆参加人数

企業、自治体等36人、教職員19人 合計55人(学生除く)



地域連携活動の記録 (二〇一八・四～二〇一九・三)

五月	十日	□ 「調理と素材」生産者講義(トマトを用いたレシピ開発)
	十七日、十八日	□ 「第十一回東京発！物産・逸品見本市」に参加し、地域連携活動の紹介と企業相談を実施(新宿西口イベント広場)
六月	二十四日	□ 「調理と素材」中間報告会(トマトを用いたレシピ開発)
	二日	□ 「調理と素材」農園見学(トマトを用いたレシピ開発)
	十四日	□ 「調理と素材」成果報告会(トマトを用いたレシピ開発)
	二十四日	□ 「第十四回さがみはら環境まつり」に参加。「大学の先生と楽しむ体験教室」を開催(ユニコムプラザさがみはら)
七月	二十六日	□ 講座「就活に役立つメイクとデリケートゾーンのたしなみについて」
	三十日	□ ヒガンバナ植付け(城北自治会)
	八日	□ 「調理と素材」トマト料理試食販売会 JA横浜「ハマッ子」直売所都築中川店
十月	二十二日	□ 「子ども体験塾2018」開催(町田キャンパス)
	十二日、十三日	□ 相模原市「第五十回みんなの消費生活展」に参加(ミウイ橋本)
	十四日	□ 第六回まちづくりフェスタ参加(ユニコムプラザさがみはら)
	二十八日	□ ハローウィン衣裳と舞台衣裳の展示イベント(イーアス高尾)
十一月	三十日	□ 公民連携相模原イノベーションスクール開講オリエンテーション (相模原市けやき会館)
	六日	□ 「第一九回ビジネスフェア」参加(東京ドームシティ プリズムホール)
	十一日	□ 町田市「第五回食育フェア」参加(町田市民フォーラム)
十二月	三日	□ 「第一回保育付き！子育て教室」開催(クッキングサロン ハマッ子)
	十四日、十五日	□ 「パレエフレグランス フレイトラント・クリスマス第八回公演」衣裳制作 (北千住シアター1010)
二〇一九年	一月 一六日	□ 相模原市公民合同セッション「公開プレゼンテーション」出席
	二十三日	□ 公民連携相模原イノベーションスクール公開プレゼンテーション
	一二日、十四日	□ コミュニティオペラ「こうもり」衣裳制作(南大沢文化会館)
二月	一日	□ 法政大学「第三十四回多摩シンポジウム×地域交流DAY2018」に出席
	五日	□ 「第二回保育付き！子育て教室」開催(クッキングサロン ハマッ子)
	八日	□ 「育マCoomebackセミナー」開催(クッキングサロン ハマッ子)
	八日	□ 「東京家政学院大学 地域交流会2018」本学学生が主体となった地域連携活動報告会を開催(町田キャンパス ローズコート)
三月	九日	□ リニア・シンポジウム「私達が作るこのまちの未来」(相模原産業会館)
	十四日	□ まちだ〇ごと大作戦「竹あかりの街、あいはら」竹加工参加



東京家政学院大学地域連携ポリシー

東京家政学院大学は、建学の精神である「KVA精神」(知識の啓発・徳性の涵養・技術の錬磨)に基づき、生活者の視点から、家政学を中心的な学問分野として教育・研究を行い、個人・家庭・地域の豊かな暮らしはもとより、地球規模の問題解決に貢献できる人材を育成し、社会に送り出すことを目指している。

本学が中心的に取り扱う家政学の分野は、地域社会(Community)との関わりの強い学問分野であり、それゆえ、本学における教育・研究活動にあたっては、地域社会との連携が不可欠である。また、その成果は、人々の暮らしや文化の発展・向上に寄与するものである。

本学では、こうした学問分野の特長を踏まえ、地域社会への貢献を教育・研究に続く第三の使命と位置づけ、その実現のために、ここに地域連携ポリシーを定める。

- 1 大学は地域社会の一員であること、また本学の発展・成長は地域社会とともにあることを共通の理解として自覚し、地域連携活動を推進する。
- 2 地域社会との連携を推進することにより、研究活動の充実と成果の蓄積を図るとともに、実践的な教育機会の創出に務め、社会に貢献する有為な人材育成を目指す。
- 3 教育・研究活動の成果を積極的に地域社会に還元し、人々の暮らしや文化の発展・向上に貢献する。

(平成23年4月1日制定)



